

大学院博士課程体験記②④

若狭はな（わかさ はな）医学院公衆衛生学教室



光栄にも、今回この体験記を担当させていただくことになり、過去の記事を遡って拝見しました。諸先輩方大変参考になる体験記には到底及ばない物になると思いますが、あくまでも在学中の学生として、ありのままの経験を記そうと思います。

はじめに簡単に自己紹介をさせていただきます。私は学部からストレートに修士・博士課程へと進学をし、現在博士課程の2年でフルタイムの学生をしています。看護師の免許は持っていますが、残念ながら臨床経験はありません。おそらく医学院によくいる博士課程学生のタイプではありませんし、反対に極端にレアというわけでもないような気がします。

さて、今でこそ医学院の学生ですが、先述の通り学部の時には看護学を学んでいました。同じキャンパスではありましたが、自分がこの建物に通学することになるとは入学当時思ってもいませんでした。それが医学院への進学を決意するのですから、人生何が起こるのか、自分が選択することでさえも、分からないものです。

そんなこんなで、修士課程から現在所属している研究室にお世話になることになりました。修士課程に入学した当時は、博士課程のことは強くは意識しておらず、むしろ「就活始めないとなあ」と思っていました（実際にして内定もいただいていた）。しかし授業をこなし、研究を進めていくうちに、「この分野をもっと掘り下げていきたいな」という気持ちが芽生えてきました。それに加えて、調査で研究対象者の方々と実際に関わる機会や行政の方との交流を通じて、「どうしたら研究結果を現場にうまく還元できるんだろうか」と考え始めたことも一つのきっかけで博士課程への入学を検討し始めました。卒業研究とは比べ物にならないくらいには大変でしたが、何とか修士論文を完成させ、博士課程に進学したのでした。

博士課程体験記にもかかわらず、ここからようやく博士課程での話が始まります。まだ1年半ほどしか過ごしていませんが、修士課程での2年間とは大きく違う日々を過ごしています。博士課程での大きな経験の一つに研究費の申請があります。所属研究室の先輩にお声掛けいただき、一緒に申請にトライすることになりました。申請書自体は他の研究費よりも簡単な内容のものでしたが、それでも私たちにとっては十分につらく、同時に大変勉強になるものでした。文字通り悲鳴を上げながら申請をしましたが、所属研究室の玉腰教授のご指導や周囲の方々のご支援のおかげで無事に研究費を獲得することができました。無事に……とは書いたものの、そこから

始まった研究は大変なもので、今まさに現在進行形で対象者のリクルートに苦勞しています。これまではすでに先生方がセッティングした研究に参加していたため、研究を実際に組み立てて実施することがどれほど大変なことなのか、本当の意味で分かっていなかったのだと痛感しました。

貴重な経験の2つ目に専門学校での非常勤講師があります。ご縁あってお声掛けいただき、今年で2年目になります。「こんなに何も分かっていない私が……」と思わないこともないのですが、そんな考え方で教壇に立つのは失礼だと、これまで以上に身を引き締めて基礎から学び直しています。さて、私が専門学校でしている、自分がこれまでに学んできた専門的な知識を、相手に分かりやすく伝えるということは、教育の場に限らず、実は様々な分野で生きる経験だと考えています。例えば、所属研究室では行政などの研究者以外との関わりが多くありますが、そこで相手のニーズに応じるためにもこういったスキルが重要であると考えています。まだまだ未熟ではありますが、せっかくだいたい貴重な機会ですから自分を成長させるために役立てたいと考えています。

博士課程での経験について簡単に記載しましたが、言いたかったことは「修士課程までとは全く違う経験ができる」ということです。未熟ながら一応研究の基礎（の基礎）を学んだ人とは判断されるので、それまでにはなかなかできなかったことを体験できるチャンスがたくさんあります。簡単で楽しいことばかりではありませんが、これまでなかなかできなかったことをぜひやってみたい、と考える方は博士課程への進学を視野に入れてもいいのかもしれません。

最後になりますが、これまで学んできたことを軸に、今後も一つ一つ丁寧に、周囲の皆さまへの感謝を忘れず、邁進していきたいと思っています。



研究風景